

刊行にあたって

阪神・淡路大震災は五千数百人もの犠牲者を出し、たくさんのビルや家屋が倒壊するなど、私たちの想像をはるかに越える災害でした。

被災地では、国や、県、市などの地方公共団体を始め、被災住民自ら、また全国各地からはせ参じたボランティアなどが一丸となって復興に努力されています。しかしながら、被災後8ヶ月以上たった現在でも、待機所や仮設住宅などで不自由な生活を余儀なくされている方々が数多くおり、一日も早い完全復興を願うものです。

この度、阪神・淡路大震災に派遣した保健活動班の感想文をまとめることとなりました。派遣された職員にとって初めて体験する、破壊された無残な都市の姿、被災者の受けた苦しみ、困難に対する率直な感想や、献身的な活動報告あるいは震災対策等についての本市への提言がつつられています。改めて、本市職員の行動力、自覚、勤勉などを再確認いたしました。

また今回の救援活動を通じて、公衆衛生活動の原点を再確認するとともに、被災地神戸の保健所職員の苦悩の中に、また全国各地から支援にかけつけた保健婦との連携の中に、災害救助活動を始め復旧活動、震災対策など多くのことを学びました。特に、復旧時の保健活動は長期にわたり、被災者の立場に立った計画的かつ効率的な活動が求められました。私たちはこの多くの教訓を本市の公衆衛生活動に生かしていかなければなりません。

現在、本市においてもこの教訓を取り入れながら防災計画を急ピッチで見直しており、災害に強い都市づくりを進めるとともに応急時の計画、体制づくりに努めていきたいと思います。

最後に、今回の保健活動に関係されました関係各位に感謝申し上げますとともに、不幸にも地震により被災されました多くの犠牲者の方々の御冥福と被災地の更なる復興をお祈りいたします。

平成7年9月

名古屋市衛生局長 猪飼 通夫